

1. テキスト

「内部知覚において」111頁7行目から112頁最後から2行目まで

2. テキスト要約

ここで西田は「質料」をまず「特殊化の原理」と考えた。真の質料は「形相（幾何学的球：引用者）に外から偶然的に加える」鉄や銅のような材料ではない。それは材料を個物化する「特殊化の原理」であり、「純なる形相」・基体を個物化する原理であるとされる。このように、真の「質料」とは述語にならない・不可知的な基体を可知的にし、合理化する（基体を主語にする）「特殊化の原理」である。

そして、西田は「質料」の意味をさらに深めて、それをアリストテレスの「第一質料」としている。西田のアリストテレス解釈によれば、「すべて何等かの意味に於て知識内容となるものは一般的なるもの（何らかの形相を持っているもの：引用者）」であるが、「第一質料」とは質料に含まれる形相を一切取り除いたものであり、それは感覚的な世界に存在していないものである。それゆえ、「第一質料」は「すべての実在の質料となる」ことができるものである。鉄や銅などの質料には形などの形相があると考えられて、全く形・形相を持たない質料（鉄とも銅とも言えなくなる質料）、しかもそこから熱いとか硬いとかの性質・形相を得るような質料が「第一質料」である。「すべての経験内容を否定した時（一切の形相を抜き去った時：引用者）すべての実在の質料となる第一質料ともいべきものを見ることができる」とされる¹。

次に西田はカントの「超越論的对象」を取り出して、「第一質料の考えの中にカントの超越的对象の意義が含まれている」と述べる。カントの「純粹理性批判」によると、現象は「物自体ではない、単に表象に過ぎない」。それらの表象は純粹統覚（認識主観）によって統一されて、対象になることができる。しかし「感性的な表象はそれ自身では、まさに感性的表象様式においては、対象とみなされてはならない²」。そうして、「此表象はさらにもはや直覚する（感性的に見る：引用者）ことのできない対象（超越論的对象：引用者）を持たなければならぬ」とされる。目の前にある「この花」について永遠に述語つけること（赤い、香りがいい：引用者）ができると考えられる。この語る主観とは与えられる感性的な表象を統一して実在界を構成する認識主観（純粹統覚）である。「認識主観」の対象となる客観的なもの即ち「この花」を中心に語りうるようなものは「超越論的对象」である。

カントは我々の経験的概念が経験的客観性を得るのは、「此超越的对象による」のであると考える³。西田はカントの「超越論的对象」は単に形式的な「意識の必然的統一」であって、そこに「特殊化の原理を見出すことができぬ、従って客観的知識を与えることはできぬ」と批判している。そうして、西田は「客観的知識の根元となるには、超越的对象は特殊化の原理（質料：引用者）を含んでいなければならぬ」とし、「純粹統覚は自己自身の中に質料を有する形相でなければならぬ、即ち純なる作用として、一つの本体でなければならぬ」と自らの「超越論的对象」及び「認識主観」の解釈を述べている。

西田によれば、カントの「超越論的对象」は特殊化する原理（質料）を含むものであるべきである。それは「認識主観に対して、所与の意味⁴を持つ」とされる。認識の形式（カテゴリー）は「所与」（具体的な実在）と結合することによって、経験的客観性を得るのである。同様に我々の経験界は「所与」から作られることによって、経験的実在界となるのである。かくして「所与」は「本体の質料として根本的潜在」である。従って、アリストテレスが言うように、唯個物のみ個物を生じることができる、現実なるもののみ現実を生ずるとすれば、「第一質料の背後に形相の形相といふ如き第一動者がなければならぬ、是に於て超越的对象と意識の必然的統一とは合一して、一つの直観となる」とされる。

3. 哲学的問い

「純粹経験」は判断・分別以前であって、いくら疑おうとしても疑うことができない事実であって、この事実に対する判断とか反省とかはどこまでも疑うべきものである。西田は「純粹経験」を唯一の実在とし、それによってすべてを説明しようとする。しかし、「純粹経験は唯一の実在である」というのは判断であって、疑うべきものではないか。彼はなぜこの矛盾を知っていながら、依然として純粹経験は唯一の実在であると主張するか。

¹ 例えば「この花は赤い」という判断から「赤い」も「花」という形相も取り除いた時、そこに残ったものが「実在」、すなわち「このあるもの」・「あるとしか言えないもの」であり、それが「第一質料」だということである。またそこから「第一質料」が「赤」とか「花」とかの形相を得るのである。

² カント『純粹理性批判』第一版、A104

³ カントは「此概念は何等の直覚を含まず、知識が対象に関係する限り」、知識に「統一を与えるもの」であるとしている。それゆえに「此関係が意識の必然的統一に他ならない」とされる。また、カントによれば、「意識の必然的統一」とは純粹統覚・悟性の働き方であり、カテゴリーである。そうして、概念的知識は「意識の必然的統一」によって、経験的客観性を得ると考えられる。

⁴ 所与の意味について、西田の使い方はカントと異なる。カントはそれを雑多な感性的なものが与えられると考えるが、西田はそれを知的直観においてのみ見られる実在、いわばそこでそのままにすべて・宇宙全体が与えられると考える。